



◎釧路市に隣接する釧路町唯一の公立高校。校訓は「自主協調・創意実践・進取激刺」。2010年度、「北海道高等学校キャリア教育推進事業」の研究推進校に指定。直木賞作家、オリンピック出場選手など、卒業生が様々な分野で活躍している。

設立

1978(昭和53)年

形態

全日制/普通科/共学

生徒数

1学年約130人

2016年度進路実績(現役のみ)

公立大は、釧路公立大に4人が合格。私立大は、札幌大、札幌学院大、北海道情報大などに延べ9人が合格。短大、専門学校進学 56人(うち看護系6人)。就職 62人。

住所

〒088-0618  
北海道釧路郡釧路町富原3-1

電話

0154-36-2750

Web Site

<http://www.kushirohigashi.hokkaido-c.ed.jp>

北海道  
釧路東高校

基礎学力向上

# 独自教材とテスト結果を活用した学び直しで、学力の底上げを図る

変革のステップ

背景

◎市内の高校再編により、入学者の学力低下が課題に。今後も同様の傾向が続くと推測される中、学校全体での学力の底上げが必要となる

実践

◎独自教材の学び直し「ベーシックスタディ」を推進。また、テストを活用した詳細な分析や、成績下位層のための「基礎力講習」を実施

成果

◎生徒の学習に向かう意欲や、基礎学力が著しく向上。国公立大学を目指す生徒も増加

STEP 1

STEP 2

STEP 3

釧路市内の高校再編で  
成績下位層の生徒が増加

北海道釧路東高校で学び直しの検討が始まったのは、2011年のことだ。公立高校の統合再編において、近隣の高校が閉校。その影響で、同校では、入学者の学力が相対的に低下していることが課題となっていた。今後も同様の傾向が続くと予測されたため、学校全体で学力を底上げする体制を整えようと、当時の校長が発案したのだ。同校に赴任して13年目となる弥田将人先生は、こう振り返る。

「私が赴任した頃は、持ち回りで校内巡回を行うなど、生徒指導の徹底により、ある程度落ち着いていましたが、時には授業が成立しないこともありました。生徒たちが落ち着いて授業に集中できる環境を整えるために、生徒指導だけでなく学習指導も強化していく必要がありました」

卒業生の就職先から、義務教育段階の学習内容の定着度について指摘を受けたこともあり、基礎学力向上は喫緊の課題だった。そこで、弥田先生ら数人の教師が、関東近郊の学び直しに取り組む先進校を視察して指導ノウハウを収集し、小・中学校段階の学習内容からなる5教科の独自教材を作成するなどした。そして、12年度1年生(35期生)から、週2時間の学校設定科目「ベーシックスタディ(以下、BS)」を始めた。

## 書写と学び直しによって 基礎学力の定着を図る

BSの授業は、生徒の自学自習で進められる。50分間の授業のうち、前半20分が国語と英語の書写、後半30分が各教科の学び直しだ。書写では、担当教師が小説や評論などの課題を選び、



**恩塚 寛** おんつか ひろし  
北海道釧路東高校  
教職歴29年。同校に赴任して6年目。進路指導部副部長。「情報は保護者・同僚と共有し、チームプレーで結果を出す」



**森下 貴秋** もりした たかあき  
北海道釧路東高校  
教職歴21年。同校に赴任して5年目。教務部長。「おこり高ぶることなく、常に学ぶ姿勢を大切に」



**諸橋 征爾** もろはし せいじ  
北海道釧路東高校  
教職歴20年。同校に赴任して6年目。1学年主任。教務部副部長。「あたり前のことがあたり前にできる生徒を育てる」



**弥田 将人** やだ まさと  
北海道釧路東高校  
教職歴17年。同校に赴任して13年目。生徒指導部長。「自分が必要なくなるように、自分のできることを、楽しみながら、補助輪のイメージで」



**阿部 義之** あべ よしのぶ  
北海道釧路東高校  
教職歴10年。同校に赴任して5年目。生徒会部

「誰にでも優しく、誰にでも親切に」

生徒に書き写しをさせる。優れた文章や多様な考えに触れて表現力を高め、長い文章を集中して書くための運筆力をつけることがねらいだ。

教科の学び直しは、1回の授業で1教科とした。「反復は力なり」をキャッチフレーズとし、国語、地歴・公民、数学、理科、英語の基礎的な問題のプリント(図)に繰り返し取り組む。例えば、国語は小・中学校段階の漢字練習、数学は小数・分数などの計算問題、化学は基本的な元素記号や化学式の復習といった内容だ。プリントは、各教科の教師が分担し、作成した。表には問題、裏には解答を印刷しておき、

「ベーシックスタディ」理科

The image shows a chemistry worksheet with several sections:

- Table 1:** A periodic table with elements labeled with their symbols (H, He, Li, Be, B, C, N, O, F, Ne, etc.).
- Table 2:** A table of chemical formulas and their names in Japanese.
 

化学式	物質名
H <sub>2</sub> O	水
CO <sub>2</sub>	二酸化炭素
NH <sub>3</sub>	アンモニア
CO	一酸化炭素
NO	一酸化窒素
HCl	塩酸
- Table 3:** A table of chemical formulas and their names in Japanese, including water, carbon dioxide, ammonia, carbon monoxide, nitric oxide, and hydrochloric acid.

\* 学校資料をそのまま掲載

生徒は自力で問題を解き、分からない問題があれば、プリントをめくり、自分で答えを確認しながら進めていく。自学の習慣を身につけることも、BSの目的の1つだからだ。

授業の担当は、学年・教科にかかわらず、すべての教師でローテーションを組んだ。生徒の自学形式にしたのは、授業が教師の負担にならないようにという配慮もあった。

プリントの取り組み状況を見れば、生徒たちがどこでつまづいているのか、どのような知識が不十分なのか分かり、それを通常授業の指導に生かすことができた。教務部長の森下貴秋先生は語る。

「机間巡視をしながら生徒が解いている様子を見てみると、小・中学校段階の学習内容のどこが抜けているのか、どこが弱いのかについて改めて気づかされます。そこで、多くの生徒が苦手としていて、通常の授業で必要となる前提知識を、BSのプリントに盛り込むようにしました。あらかじめBSで学習させておくことで、授業の導入がスムーズになりました」

## 教師のアンケート結果を基に こまめに教材を見直す

生徒の状況に応じてプリントを毎年少しずつ改善していることも、BSが機能している理由

の1つだ。毎回、授業を担当した教師にアンケートを取り、問題の難易度、問題量、解答時間などに対する生徒の様子を回答してもらおう。それを教務部が集約して各教科担当に伝え、難易度や問題量などを見直す。また、書写は、旬の話題をテーマとする場合も多いため、頻繁にテキストを入れ替えている。

BSを始めた当時、2・3年生ではBSは学校設定科目に設定されていなかった。そこで、35期生については、2・3年生でも弥田先生が自身の授業で書写と国語のBSを継続した。すると、それまでの学年にはなかった変化が表れたという。

「それまでの学年と比べて、明らかに、生徒の様子が落ち着いていました。ほかの学年では、教師に反発する生徒もいましたが、35期生にはそうした問題は見られませんでした」（森下先生）

大学入試においても、目覚ましい実績を上げた。例年2、3人だった国公立大学合格者が、35期生では、推薦・AO入試も含めて6人上ったのだ。

「35期生には、授業にしっかりと参加し、最後まで諦めない生徒が多くいました。授業後は生徒が自ら黒板を消すなど、それまでになかった姿も見られました。学習に向かう姿勢が身についたことが、入試の好成績につながったのだと思います」（弥田先生）

## テスト結果を詳細に分析し、 生徒の学習意欲向上につなげる

BSにより生徒は変わったが、生徒個々の課題は把握しきれなかった。そこで、13年度の1年生からベネッセの「基礎力診断テスト」(\*1)を活用し、特にGTZ(\*2)のD3の生徒のつまづきには、個別に対応している。進路指導部副部長の恩塚寛先生は、次のように述べる。

「それまでも、1・2年生は年2回、3年生は1回、「基礎力診断テスト」を受験していましたが、担任が生徒に帳票を返すのみでした。そこで、教務部主導でテスト結果を分析し、BSの成果を検証すると同時に、生徒一人ひとりがどこを苦手としているのかを把握し、今後の指導に生かすようにしました。先生方には、成績下位層の学力の底上げを意識してほしいと伝えました」

活用方法は次の通りだ。テスト結果を教務部が教科ごとに分析してプリントにまとめ、学年集会で生徒に配布して説明する。特に、1年生第1回では、「基礎力診断テスト」やGTZについて説明し、D3では希望進路の実現が厳しいことを強調して、生徒に「基礎力診断テスト」の重要性を認識させる。

また、次のテストに向けて、授業の受け方、長期休業中の過ごし方、付属教材「One We ek トライアル」の活用法なども示す。

学年集会后には、2日間かけて、LHRで生徒一人ひとりと面談を行い、帳票を返ししながら結果の総括、学習のアドバイスなどを行う。D3からの脱却を果たした生徒の中には、うれしさのあまり泣き出す生徒もいるという。面談の後、学年によって任意に保護者会を開き、テスト結果や今後の指導方針・内容の説明も行う。

## 「基礎力講習」の実施で D3ゾーンの生徒ゼロを目指す

次の「基礎力診断テスト」までの1〜2か月間には、D3の生徒を対象とした「基礎力講習」を実施する。ただ、1年生第1回の後は、結果がD3以下でも参加は任意とした。「基礎力講習」は、進路選択の幅を広げるチャンスと認識させた上で、主体的な参加を重視しているからだ。教務部副部長の諸橋征爾先生は強調する。

「第1回はテストの重要性を生徒はあまり理解していない状態で受けるので、D3でも講習を強制しません。D3のままでは卒業後の進路がおぼつかないという現実を伝えて、講習を受けずに自分の力で頑張ると言うならやらせてみる。その上で、第2回のテストでもD3のままであれば、講習に必ず参加するように指導しています」

「基礎力講習」は、放課後に各教科4〜8回実施する。1回50分で、BSと同様に、各教科

\*1 GTZ(学習到達ゾーン)という指標で生徒一人ひとりの基礎学力の定着度と学習力、コミュニケーション特性(自我同一性)を測る、ベネッセの生活・学習指導用テスト。  
\*2 学習到達ゾーンのこと。ベネッセのテストにおける共通の学力評価指標。「S」~「D3」の15段階があり、基礎力診断テストでは、そのうち「A2」~「D3」で評価される。



の教師が作成した独自プリントに取り組み。BSと異なるのは、できるところまで自力で解答し、分からない場合は教師に質問しに行く点だ。指導は、学年団がチーム・ティーチングで行う。原則1人は教科担当が入るようにしているが、教科外の教師が担当する場合もある。当時教務部でプログラムを立案した阿部義之先生はこう語る。

「D3からの脱出を目的とした講習ですから、おのずと学習内容は小・中学校段階のものとなります。そのため、担当教科を問わずに指導できます。生徒の質問に答える形式の講習なので、生徒と教師の距離が近くなるのもメリットの1つです。講習を通して関係性が深まると、通常の授業や日常生活においても、質問や相談をしてくるようになります」

「基礎力診断テスト」の分析を通してBSの効果も確認できた。BSを行っていない学年は、決まって1年生第2回以降の偏差値が下がっていたのに対して、3年間BSに取り組んだ35期生の場合、偏差値は3年生まで1度も下がることなく上昇し続け、D3の生徒が激減した。

『基礎力診断テスト』は、学力と同時に、生徒の学習意欲を数値化したものでもありません。授業へ向かう姿勢がよくなれば、おのずと成績も上がり、それによってさらに生徒の意欲が上がり、もっと頑張ろうという雰囲気

が醸成されていくのです」（諸橋先生）

## 学校が一丸となり、さらなる学力向上を目指す

16年度、BSが2年生でも1単位の学校設定科目として設けられた。35期生の躍進や成績推移を通して、継続実施が望ましいと判断したのだ。プリントは、国語ならば、1年生では漢字練習だが、2年生では慣用句など、1年生よりも発展的な内容になる。通常授業の復習となるような内容を盛り込み、定着を図る教科もある。また、3年生でも、数年前から学年の発案により月1〜2回、LHRを使って書写と就職対策プリントに取り組み「キャリアステディ(CS)」が始まっていたが、それも継続していく方針だ。

国公立大学を目指す生徒が増えたのも、大きな成果だ。15年度卒業生の中には、第1志望を目指して浪人する生徒も出た。強い意志を持って学習を継続する生徒が現れたことを、教師は好ましく受け止めている。

「現在、学校に自習室をつくる計画を進めています。静かに学習に向かう環境を提供することで、学びに向かう環境をさらに醸成していきたいと思っています。その上で、今後の目標として、成績下位層ではDゾーンの生徒ゼロ、上位層では国公立大学2桁合格を掲げています。決して容易なことではありませんが、学校が一丸となって取り組みれば必ず達成できると信じています」（恩塚先生）

## 情熱 若手教師が語る、指導変革への

### 基本的な方針を示したことで スムーズに進んだ新しい取り組み

生徒会部 阿部義之

本校に5年前に赴任し、2015年度まで教務部に籍を置きました。「基礎力講習」の計画立案を任せられたのは2年目のことです。『基礎力診断テスト』を学力向上のために活用したい」という恩塚先生の提案を受け、生徒の実態に合わせて、どのように進めていくかを形にしました。

当初、「基礎力診断テスト」を軸にした講習を行うことだけが決まっていました。1年生の国語と英語の先生に、どの教科の先生が入っても指導できる教材の作成をお願いし、数学は私自身が作成しました。学年集会や面談、講習期間のスケジュールは、テスト結果が返却される時期から逆算して組み立てました。それらの案をたたき台に、教務部や当時の1学年団に相談をし、意見を聞きながらプログラムを作りました。

学校全体で講習を行うことを説明すると驚く先生もいましたが、生徒のためになることなら労を惜みまず協力してもらえるのが本校のよいところ。進め方を各学年に任せていたら、取り組みに差が出たかもしれませんが、教務部主導で基本的な方針を示したことで、取り組みがスムーズに進んだのだと思います。

今、本校は変革の過渡期にあります。本年度から2年生でもBSが始まり、私自身も担当教科の課題が見えてきました。できるならあと数年は本校にいて、変革にかかわり、変わりゆく生徒の姿、学校の姿を見届けたいと思います。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2015年6月号指導変革の軌跡「[石川県立金沢北陵高校](#)」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け